

細部に至るまで精緻な石膏彫刻が施されている



エントランスホールには、イスラム的な造形の葱花形アーチが取り入れられている



温故
知新

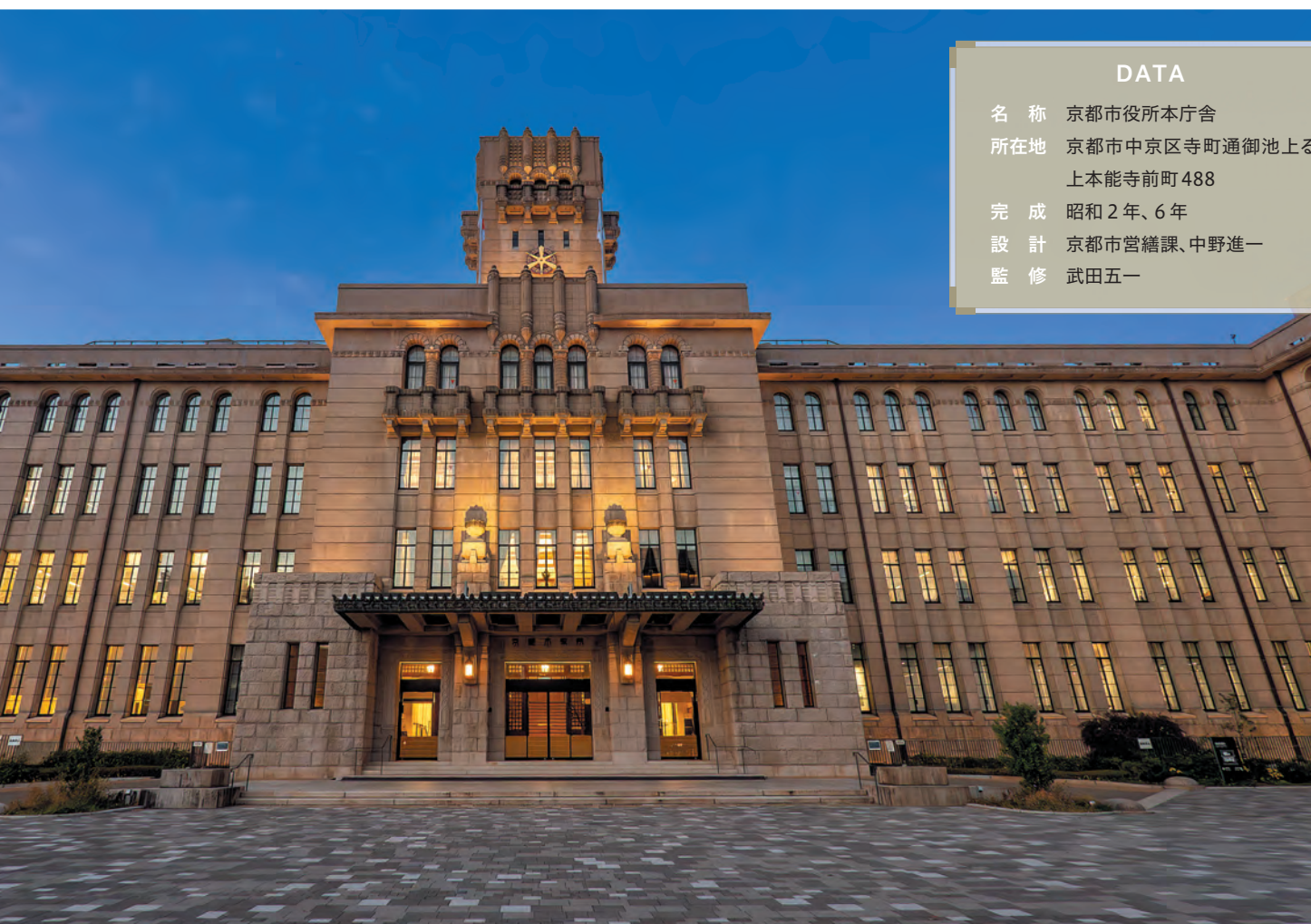
第36回

レトロ建築を歩く

京都市役所本庁舎

DATA

名称	京都市役所本庁舎
所在地	京都市中京区寺町通御池上る 上本能寺前町488
完成	昭和2年、6年
設計	京都市営繕課、中野進一
監修	武田五一





日本、中国、インドなどの東洋的モチーフが
取り入れられた塔屋の意匠



正面階段の正面には京都の四季を描いたステンドグラスが輝く

日 本の歴史的建造物が数多く建ち並び、多くの外国人観光客が訪れる京都。今回はそんな京都の中心部にある、京都市役所本庁舎を紹介する。

現在の京都市役所本庁舎は、開庁から数えて3代目に当たる建物である。

「関西建築界の父」といわれる武田五一による監修のもと、設計については京都市営繕課が、意匠については主として中野進一が担当し、昭和2年（1927年）4月に本庁舎東館が竣工。

昭和6年に、2代目の市庁舎を改築し建設された本庁舎西館と合わせ、現在の本庁舎の全容が完成したという。

その後も増改築、耐震・バリアフリー化が施され、令和3年（2021年）8月に改修工事が完了。本庁舎は、いまのかたちを整えられた。

京都市役所本庁舎は、地上4階地下1階の鉄筋コンクリート造り。左右がほぼ対称で、中央の塔から両翼を突き出させるなど、ネオ・バロック様式（19世紀末に欧米で流行した、左右対称の外観、豪華絢爛な装飾が特徴の建築様式）で建設された。

ただし、全体の建築様式は西洋のネ

オ・バロック様式を踏襲しているものの、建物の内外にわたり、日本的、中国的、インド的、イスラム的と多彩な東洋的モチーフへの置換え・変形がみられる。

この東洋的モチーフへの置換えが、本庁舎最大の特徴であり、特に外観では塔屋部、内部ではエントランスホールや市会議場に顕著に現われている。

塔屋部分の、毛筆をかたどった装飾には日本的な造形が、突き出した部分を支える舟肘木（ふねひじき）といわれる部材には中国的な造形が、壁面を飾る正方形の凸凹にはインド的な造形が取り入れられている。

内部の正面エントランスホールには、イスラム的造形の葱花形（ねぎばながた）アーチが取り入れられ、照明器具や床のタイル等は、竣工時のデザインで復元されている。

また、階段部などの細部装飾に見られる石膏彫刻の施工技術は、現代では再現が困難な非常に高い技術的価値がある。

ことし3月、京都市役所本庁舎は国登録有形文化財へ登録された。

